

北海道言語研究会 研究例会報告

2020 年度の研究例会は以下の日程とプログラムで開催した。参加者諸氏の間で活発な議論が交わされた。

・ 第 19 回研究例会

(2020 年 9 月 25 日(金)13:30--17:00; 会場: 室蘭工業大学・教育研究 2 号館 Q502 号室)
13:30--14:10

小野真嗣 (室蘭工業大学)

「コロナ禍の国際交流 - 渡航から遠隔は新しい流れになるのか - 」

2020 年に入って早々、中国武漢発の新型コロナウイルスの世界的な蔓延によって単なる感染者だけでなく、これまでにない死者や重傷者を発生させた世の中になってしまった。経済が深刻な状況にまで落ち込む国や地域も発生し、海外渡航による留学やワーキングホリデーといった活動も全面的にストップする時代となった。一方で、ICT を駆使した国際交流も「新しい形」と称して芽生え始め、2020 年夏頃までには、これまでの海外研修に置き換えて、一つのビジネスとしてオンライン国際交流研修が出始めるまでになった。本学においても、前期 15 週の授業と同様、緊急措置的にオンライン国際交流に手を付け始めたが、様々な面が浮かび上がってきた。本発表は、2020 年度前期に本学で試行的に実践したオンラインによる国際交流について、実施概要および学生アンケート結果を報告する。学生活動の観察や、アンケートから見えてきた学生の取り組み姿勢や考え方などについて、述べることとしたい。

14:20--15:00

三村竜之 (室蘭工業大学)

「アイスランド語から見た一型ストレスアクセントの研究」

アイスランド語は、語の品詞や語種、内部構造の別を問わず、第一音節に主強勢の置かれる一型ストレスアクセントの言語である。本発表では、アイスランド語を通じて、一型ストレスアクセントの言語にいかなる特徴が見られるか、共時的側面と通時的側面の両面から考察する。

15:00--15:55

白 尚燁 (室蘭工業大学)

「第 群ツングース諸語におけるウイльта語の文法的特異性について」

本研究は、ツングース諸語の中で最も系統的に近いと考えられる第 群 (ナーナイ語、ウルチャ語、ウイльта語) におけるウイльта語の文法的特異性を明らかに

し、他のツングース諸語との類似性について考察することを目的とする。サハリ
ン島で話されるウイльта語は、ツングース諸語内部ではエウエンキー語と、周辺
言語ではアイヌ語、ニブフ語、ロシア語、日本語と言語接触があったと言われて
いる。そこで、本研究では、第 群ツングース諸語において、ウイльта語のみに
見られる文法特徴（格体系、欠如表現、可能補助動詞、後置型否定構造、名詞複数
接辞、指示転換）を提示し、同現象がすべてエウエンキー語と共通していること
を指摘する。

16:05--16:40

塩谷 亨（室蘭工業大学）

「ポリネシア諸語の基本的な句構造の比較及び形態素の分類について」

ポリネシア諸語における基本的な名詞句と動詞句の構造について、先行文献デー
タに基づいて比較対象を行い、それぞれ名詞及び動詞の前後にどのような形態素
が現れるのかを比較したうえで、それぞれの形態素がどのように分類（接辞なの
か接語なのか内容語なのか）されているのかを対比した。その結果、語源は同じ
であるのに言語によって出現する位置が異なったり、語源も機能も同じであるの
に分類が異なったりする形態素が見られた。

16:45--17:00

総会（『北海道言語文化研究』編集委員より報告事項）

・第 20 回研究例会

（2021 年 3 月 26 日（金）13:00--17:00；会場：室蘭工業大学・教育研究 2 号館 Q502 号室）

13:00--13:40

三村竜之（室蘭工業大学）

「デンマーク語 *stød* 研究の諸問題」

デンマーク語には *stød* と呼ばれる声門化 (laryngealization) の一種が観察される。
音声学的な実態や形態音韻論における振る舞いなど、*stød* という現象それ自体に
ついてはかなりの部分が明らかにされている。その一方で、音韻論的な解釈（基
底/語彙レベルでどのように指定するか）に関しては、誰もが納得する結論には未
だ至っていない。純粋に共時的な側面にのみ着目すれば、妥当な音韻解釈は数多
く提案されているものの、同系統の諸言語・諸方言に見られる（広義の）ピッチ
アクセント (musical stress/word tones) との通時的な繋がりを視野に入れると、拙
案も含めたこれまでの音韻解釈には種々の不備が残る。本発表では、先行研究に
おける音韻解釈の問題点の考察を通じて、いかにして *stød* の史的側面をも過不足
なく説明することのできる音韻解釈を提案することができるか論ずる。

13:50--15:50

室蘭工業大学 言語科学・国際ユニット（室蘭工業大学）

「オンラインコミュニケーション環境下での学生のより良い動機づけと授業実施方法
確立のための研究」研究成果報告

報告 1 : Margit Krause-Ono (13:50-14:30)

In 2020, due to Covid19, the semester started on 22 April, 2 weeks later than planned. All classes had to switch to online distance learning. From 22 June small classes were allowed to switch back to in-person teaching. One class taught by the author had experienced half of the lessons online and the other in-person. In August, at the end of the semester, the students agreed to discuss in focus groups their experiences of both forms of teaching for about 20 minutes. For the discussion, the following keywords were given: positive and negative points of the respective teaching method; the interaction between students and with the professor; non-verbal communication; remoteness; previous online experiences; technical equipment. The interviews were transcribed and analyzed. The findings will be presented.

報告 2: Brian Gaynor (14:40-15:20)

“A comparative survey of Communicative Language Teaching online and in the classroom”

The ongoing Coronavirus pandemic had necessitated a shift from classroom based instruction to online or remote instruction. This has involved a dramatic increase in the use of information and communications technology (ICT) to deliver online instruction. However, this expanded use of ICT has also required a corresponding change in learning approaches. This is particularly the case for language learning classes that are centred on communicative interaction between students, and between students and teachers. This survey of ninety students at a science and engineering university in northern Japan examined this change. Students who took both online and in-class instruction for the same course were asked to evaluate different aspects of teaching instruction, ICT use, communicative language activities, and language learning outcomes. The results show that students prefer in-class language learning for both pedagogical and psychological reasons. Findings from the survey have noticeable implications for how language learning classes should be conducted during the pandemic.

報告 3: 塩谷 亨 (15:30-15:50)

オンライン授業環境下での演習には、少なくとも二つの作業、Zoom (PowerPoint 含む)による説明解説部分と、学生が一人で Moodle やその他のオンライン課題に取り組む練習が含まれる。このうち、学生が一人でオンライン課題に取り組む練習部分においては、教室授業とは異なり、学生が作業している様子を逐一確認することが難しく、学生の学習ペースをどのように管理するかが問題となる。英語学習用のオンライン教材として導入された「ぎゅっと e」について、3つの異なる形態で学生に課した結果を分析し、本学におけるオンライン教材の適切な実施方法について考察した。

16:00--16:40

橋本邦彦 (室蘭工業大学)

「北海道言語研究会・『北海道言語文化研究』誌と歩んだ 20 年」

北海道言語研究会は、前身の室蘭認知科学研究会が活動を始めた 1997 年から数えて 25 年の道のりを歩んできました。一方、『北海道言語文化研究』誌は 2002 年に刊行を開始した『認知科学研究』誌 5 号を含め 2021 年で丁度 20 年間、毎年 1 回も途切れることなく発刊されてきました。本発表では、北海道言語研究会及び『北海道言語文化研究』誌のこれまでの歴史を振り返りつつ、言語文化研究へ果たしてきた意義と貢献を明らかにします。さらに、研究活動 研究成果執筆 研究成果発表 研究領域での評価という過程を循環させて研究を推し進めていく上で、本研究会及び研究誌が今後どのような形で寄与していけるのかについて考えます。

16:45--17:00

総会 (『北海道言語文化研究』編集委員より報告事項)

スタイルシート

- (1)使用言語: 日本語もしくは英語。
- (2)原稿:『WORD』で読める形式のファイル (doc または docx ファイル)と印刷時の体裁確認のための PDF ファイルを提出する。宛先: HLCJournal@gmail.com スタイルシートのテンプレートおよびPDF化用のフリーソフトに関しては、本研究会の WEB ページを参照。(URL : <http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/style/>)
- (3)余白(マージン): 上端 30mm 下端 25mm 左端 25mm 右端 25mm。
- (4)行数:37 行。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
- (5)字数:全角 39 文字または半角 78 文字。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
- (6)フォント:和文は MS 明朝、MS P 明朝、英文は Times New Roman のみを認める。特殊文字を使用する際には、unicode を用いることとする。
- (7)ポイント数および書体 :
- | | | | |
|--------|-----------|------------------|------|
| 題名: | 18 ポイント | 太字 | 中央寄せ |
| 氏名: | 14 ポイント | 太字 | 中央寄せ |
| 要旨: | 9 ポイント | 「要旨」という文字のみ太字 | |
| キーワード: | 9 ポイント | 「キーワード」という文字のみ太字 | |
| 本文: | 10.5 ポイント | | |
| セクション: | 10.5 ポイント | セクション番号と題は太字 | |
| 謝辞: | 9 ポイント | 「謝辞」という文字のみ太字 | |
| 注: | 9 ポイント | 「注」という文字のみ太字 | |
| 参考文献: | 9 ポイント | 「参考文献」という文字のみ太字 | |
- (8)タイトルおよび氏名:和文と欧文の2種類で書く。本文と同じ言語を先にする。和文の姓と名の間には全角の空白を 1 つ入れる。欧文の氏名は姓をすべて大文字にする (例:John BINTLET)。和文と欧文それぞれの間に 1 行の空白を入れる。
- (9)ページ数:原則として図表を含め、20 ページ以内とする。
- (10)要旨:日本語でも英語でも可。場所はタイトルの下に 1 行空白を入れた後。分量は日本語の場合 400 字以内、英語の場合は 200 語以内。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)、両端揃えにする。
- (11)キーワード: 5 つ程度のキーワードを要旨の下に 1 行あけて書く。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)。
- (12)セクション (節):セクションの番号は 1 から始める。セクションおよびサブセクションの番号の形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。
- (13)段落:両端揃えにすること。段落の最初の文字の下げ方等の形式は問わないが一貫した書き

方になっていること。

(14)注:通し番号をつけて脚注もしくは後注とする。通し番号の形式に指定はないが、一貫していることと、注の番号が行頭に来ないようにすること。ただし過去における研究発表情報等はタイトルの後ろに*(半角アスタリスク)を付加し、注の先頭で言及する。

(15)参考文献:文献は本文の後ろ、後注がある場合には注の後ろに付加する。形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。

(16)執筆者紹介:①氏名、②所属機関・部署、③メールアドレス、④ URL、⑤電話番号等を論文末に付加する。①は必須。②以降は任意で、その他の事項も付け加えることができる。現在の所属機関がない場合には、元～でも可。

(2021年3月31日改定)

編集後記

『北海道言語文化研究』は北海道言語研究会が年1回発行する研究誌です。これまで国内国外の研究者や大学院生の方々からの真摯な投稿に支えられて19号に達しました。北国の地方都市の大学から世界に最新の成果を発信することで、少なからず言語に関わる研究に寄与できているのではとの自負を抱いています。

北海道言語研究会の前身は室蘭認知科学研究会でした。1990年代に室蘭工業大学に属する教員が学部3年生対象の「言語と思考」という講義を担当したことが発端でした。心理学を研究する教員がこの授業を聴講させて欲しいと申し出て、言語学と心理学が出逢い、講義の終了した後も時間の経つのも忘れて熱心に議論をしていました。これが毎回続く中でもっと多くの研究者を巻き込んでサロン風の研究会ができたらいねということになり、研究会が発足したのです。発足後は1か月に1回の頻度で研究会を開催しました。手元にある『室蘭認知科学研究会報告集』第2号(2000年)を見ると、1998年4月から1999年1月にかけて8回の例会がもたれたと記載されています。発表内容もロシア語の連結動詞、ピーマン・ジャガイモ・ネットワーク、環境と知、近未来のごみ処理システム、イルカのコミュニケーション、認知哲学など多岐に渡り、分野を横断した複合領域的な研究成果を発表し、様々な観点から自由に議論する研究会であったことが窺えます。その後、発表内容をまとめるだけではなく、人間に関わる営みを対象にした研究論文を募って編集された紀要へと発展していきました。記念すべき『認知科学研究』第1号は6編の論文を掲載して2002年に発行されました。その裏表紙には次のようなテーゼが記されています。

「本研究会は談論風発のくだけた雰囲気集まりで、人間の営みに関するあらゆる分野に興味のある方に開かれています。」

このテーゼは、『北海道言語文化研究』に引き継がれることとなります。

心理学の教員が他校へ転出された後、学外の言語研究者から認知科学研究という名称だと投稿しにくいとの意見が寄せられ、第5号を発行した後、研究会と研究誌の扱う領域を言語とその関連分野に集約し、名称を北海道言語研究会に改め、2008年の第6号から『北海道言語文化研究』として発刊を開始し、今日に至っています。「言語文化」とすることで心理学や経済学、生物学や工学などの分野からは投稿しづらくなりましたが、代わりに言語学をはじめと文学や教育学の学内外からの投稿が増える結果になりました。また、大学院の博士課程に所属する人たちからも多数論文が寄せられ、若手研究者を育成する場として用いられています。

今後も発展的な変更を加味しつつ、益々活発に良質な研究成果を発信していくことを期待します。どうか自由闊達な視点で本研究会および研究誌を支援してください。退職にあたり、謝意と希望を語らせていただきました。

K.H.

北海道言語研究会 <http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/index.html>

本研究会は談論風発のくだけた雰囲気が集まりで、言語に関するあらゆる分野に興味のある方に開かれています。皆様のご参加、ご発表、ご投稿を心よりお待ちしております。

『北海道言語文化研究』への投稿について

本誌は冊子体での刊行を第19号で終了し、第20号より電子版のみで刊行することとなりました。研究論文の投稿をご希望の方は、本研究会WEBページの「スタイルシート」で投稿規定をご覧になり、スタイルシートに則った原稿を、HLCJournal@gmail.comまでお送りください。締め切りは11月30日です。原稿受領後、査読を実施し、その結果に基づいて編集委員会が掲載の可否を決定します。

研究発表について

本研究会では研究例会を3月と9月に開催しています。研究発表をご希望の方は、下記宛に発表の題目と要旨をemailでhokkaidolinguisticcircle@gmail.comまでお送りください。持ち時間は発表30分、質疑10分です。発表要旨は『北海道言語文化研究』の研究例会報告に掲載いたします。開催日時に関しては、受付後、後日メールや本研究会WEBページでお知らせする予定です。

北海道言語文化研究 第19号

2021年3月31日発行

発行者：北海道言語研究会

投稿宛先：HLCJournal@gmail.com

連絡宛先：hokkaidolinguisticcircle@gmail.com

〒050-8585

北海道室蘭市水元町27-1

ひと文化系領域

北海道言語研究会窓口

北海道言語研究会 <http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/index.html>

本研究会は談論風発のくだけた雰囲気が集まりで、言語に関するあらゆる分野に興味のある方に開かれています。皆様のご参加、ご発表、ご投稿を心よりお待ちしております。

『北海道言語文化研究』への投稿について

本誌は冊子体での刊行を第19号で終了し、第20号より電子版のみで刊行することとなりました。研究論文の投稿をご希望の方は、本研究会WEBページの「スタイルシート」で投稿規定をご覧になり、スタイルシートに則った原稿を、HLCJournal@gmail.comまでお送りください。締め切りは11月30日です。原稿受領後、査読を実施し、その結果に基づいて編集委員会が掲載の可否を決定します。

研究発表について

本研究会では研究例会を3月と9月に開催しています。研究発表をご希望の方は、下記宛に発表の題目と要旨をemailでhokkaidolinguisticcircle@gmail.comまでお送りください。持ち時間は発表30分、質疑10分です。発表要旨は『北海道言語文化研究』の研究例会報告に掲載いたします。開催日時に関しては、受付後、後日メールや本研究会WEBページでお知らせする予定です。

北海道言語文化研究 第19号

2021年3月31日発行

発行者：北海道言語研究会

投稿宛先：HLCJournal@gmail.com

連絡宛先：hokkaidolinguisticcircle@gmail.com

〒050-8585

北海道室蘭市水元町27-1

ひと文化系領域

北海道言語研究会窓口

Journal of Language and Culture of Hokkaido

No. 19

2021

 Articles

Did de Saussure find ‘de Saussure’s law’?	Tamio YANAGISAWA	1
Chiastic Structure of <i>Kamuyyukar</i> “A Prince of Japanese” Influenced by Two Japanese Stories	Noriaki OHGITA	21
English Curriculum Development in Myanmar	Brian GAYNOR	47
A study comparing Brazilian and Japanese high school students’ understanding of Conversational Implicatures	Laura A.B. KUDO	59
Preliminaries to the Historical Study of Icelandic Stress -- Based on Philological and Descriptive Researches –	Tatsuyuki MIMURA	77
Geographical imagination: student perceptions of using maps in EFL university classes	John Guy PERREM	95
Sentence-Initial Phrases in Samoan, Tahitian and Hawaiian	Toru SHIONOYA	117

The Hokkaido Linguistic Circle

北海道言語文化研究

第 19 号

2021 年

論文

- | | | |
|---|------------|-----|
| ソシユールは「ソシユールの法則」を発見したのか | 柳沢 民雄 | 1 |
| 和人の 2 編の物語に影響されたカムイユカラ「和人の若殿の物語」にみとめられる交差対句構造 | 大喜多 紀明 | 21 |
| English Curriculum Development in Myanmar | ブライアン ゲイナー | 47 |
| A study comparing Brazilian and Japanese high school students' understanding of Conversational Implicatures | 工藤 ローラ | 59 |
| アイランド語ストレスアクセントの史的研究 -文献資料とフィールドワークに基づく試論- | 三村 竜之 | 77 |
| Geographical imagination: student perceptions of using maps in EFL university classes | ジョン ガイ ペレム | 95 |
| サモア語、タヒチ語、ハワイ語の文頭句について | 塩谷 亨 | 117 |